

## 巻頭言

石原 燃

ISHIHARA Nen

去年だったと思う。市民劇団が反戦劇の上演を公共施設に拒否された、という小さな記事を見た。ネットで記事を探したが見つけられないので、詳細を確認できないのだが、記事には、過去の上演写真と一緒に掲載されていた。舞台上に並んだ出演者たちがのぼりを掲げている。のぼりには昔ながらの反戦スローガンや、現政権への批判が書かれている。その写真1枚で、判断してはいけないのだけれど、正直、あまり観てみたいとは思わなかった。

彼らの上演が拒否されていいと思っっているわけでは、もちろんない。求められれば、抗議署名にサインしたり、SNSで声明を拡散したり、できることは協力しただろう。知り合いだったら一緒に署名を集めたかもしれない。あるいは、国による上演禁止や

不当逮捕のような、より深刻な事態だったら……。やめよう。私は彼らのために動かなかった。それがすべてだ。観たいと思えない作品のために、自分の時間を削る気持ちにはなれなかった。それがいつか自分に返ってくるかもしれないとわかっていても。

多くの人は、自分より前に、自分以外の誰かが言論弾圧を受ける場面に直面する。それが深刻な事態であればあるほど、どのように反応するにしても苦しまずにはいられないだろう。どうすればいいのか。私は答えが見つけられない。

劇作家協会が設立されたとき、井上ひさし初代会長は「子どものためにクリスマス劇を書いたお父さんも入会できるよ」という理想を掲げた。このごろ、その言葉のことを改めて考えている。井上さんは、

単に入会のハードルを下げてたかったのかもれない。でも、その言葉の根底に、たとえ「子どものためにクリスマス劇を書いたお父さん」であっても、言論が抑圧されないよう守ることができる協会にしたい、という想いはなかっただろうか。最近、真っ先に弾圧されるのは、第一線で活躍するブ

口の劇作家ではなく、「子どものためにクリスマス劇を書いたお父さん」かもしれないと思うようになった。そうなったとき、劇作家協会は、あれは素人だ、活動家だと、線を引かずにいられるのだろうか。

劇作家協会はなんのためにあるのだろう。その存在によって、ひとりひとりがすり減ることなく、「お父さん」を守ることができるとしたら、救われるのだけれど。

「子どものためだけにクリスマス劇を書いたお父さん」を守れるか